教養教育科目として行われる大学キャンプ実習の教育効果の検討
社会人基礎力および自己開示に着目して

川畑 和也　福満 博隆　福島 康彦

キーワード：大学キャンプ実習、教養教育、社会人基礎力、自己開示

要旨

現代社会は変化が激しく、複雑であり、予測が困難な時代と呼ばれている。大学教育においては、学生がこのような時代を生き抜く力を養うために様々な取り組みがされている。その一つの手段として野外教育の手法を用いたアプローチも行われ、これらは社会人基礎力や他者との関係性の構築といった、様々な変化に対応する能力の向上に影響することが期待される。そこで本研究では、教養教育科目として行われる大学キャンプ実習の教育効果について、社会人基礎力や自己開示の変容から明らかにすることを目的とした。

キャンプ実習の参加者に対して、社会人基礎力や自己開示の深さ、班内で親しい友人数に関するアンケート、さらに自由記述レポートを実施した。その結果、キャンプ実習が社会人基礎力の向上に影響し、その効果は２ヶ月後まで継続することが明らかとなった。自己開示の深さについては、２泊３日のキャンプでも効果は期待できるが、決定的に影響するまでには至らないことも明らかとなった。またキャンプ実習での学びや今後の課題として、自由記述レポートの分析からそれぞれ４つのカテゴリーに分けられ、「自然」、「他者」、「自分自身」、「生活」に関する内容にまとめられた。さらに、キャンプ実習において交友関係が深まり、親しい友人が増加した者は、そうでない者と比較し、社会人基礎力をより高く向上させることが示唆された。

Ⅰ　緒言

近年のグローバル化やデジタル化の急速な進歩、新型コロナウイルスの世界的流行、突発的な自然災害など、現代社会は変化が激しく複雑であり、将来の予測が困難な時代、VUCA 時代（Volatility：変動性 , Uncertainty：不確実性 , Complexity：複雑性 , Ambiguity：曖昧性）と呼ばれている。そのような不確実な社会の中では、その時々の状況に応じて、「想定外」や「板挟み」と向き合い乗り越えられる人材、AI を使いこなす人材、AI で解けない問題、課題、難題と向き合える人材、創造的、共同的活動を創発し、やり遂げる人材などが求められている[1)]。このように、今後ますます社会の変化に柔軟に対応することができる力が重要となるが、我が国においては、2006年経済産業省より「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をする上で必要な基礎的な能力」として、「社会人基礎力[2)]」が提唱された。この社会人基礎力とは、「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」の３つの能力（12の能力要素）で構成されているものである。さらに2018年には「人生100年時代の社会人基礎力」として、個人の企業、組織、社会との関わりの中で、ライフステージの各段階で活躍し続けるために求められる力としても位置付けられ[3)]、大学教育においても社会人基礎力を育成

[1] 文部科学省：2030年に向けた日本の教育政策について、https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/09/11/1407981_02.pdf（2023年11月23日最終閲覧）
[2] 経済産業省：社会人基礎力、https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/（2023年11月27日最終閲覧）
[3] 経済産業省：社会人基礎力、https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/（2023年11月27日最終閲覧）

するプログラムが様々行われている[4)]。

令和４年度の我が国における、大学（学部）進学率は56.6％であり、短期大学を含むと６割以上の者が、大学や短期大学といった高等教育機関へ進学をしている状況である[5)]。このことは、多くの者にとって大学での教育が社会に出ていく最終的な教育の場となり得ることを示し、その中でも、特に大学の初年次生に対して実施される教養教育科目や初年次教育科目などは、より一層重要性を増していることが考えられる。実際に新しい時代に求められる教養の全体像は、変化の激しい社会にあって、地球規模の視野、歴史的な視点、多元的な視点で物事を考え、未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力として総括されている[6)]。現在、鹿児島大学共通教育センターの共通教育科目は、初年次教育科目、グルーバル教育科目、教養教育科目から構成され、自己理解、情報収集・精読・統合、論理的思考、科学的思考、倫理、実践、他者との協働の達成を理念とし、専門分野を問わず社会人として重要な基礎的能力を身につけるための取り組みとして行われている。特に教養教育科目では、幅広い視野や思考力の育成、地域社会や環境問題などの現代社会が抱える諸課題について、課題を発見する能力や解決する能力の育成を主な目的としている。このような学びには、学生同士の能動的な関わりが重要であり、アクティブ・ラーニング型授業等の他者との関わりを活かした教育手法が用いられ、学びの充実や成長実感には交友関係も重要な要素となる[7)]。しかしその一方で、近年の学生の友人数は減少傾向であることも報告され[8)]、大学教育の充実を図る側面からも、各科目においては人間関係の構築といった支援も必要となってくる。

社会人基礎力や人間関係の構築を行う手段として、キャンプや自然体験活動を含む野外教育の手法が挙げられる。野外教育は、冒険を手段とする冒険教育の要素や環境リテラシーを目的とした環境教育の要素、さらには生活体験といった要素を含み、自分自身や他者との関わり、生態系について学ぶ機会となる。特に、野外教育におけるキャンプでは、心理的側面や社会性の向上といった個人の成長の場や、体験不足を補完する場、人間関係のあり方を見直す場として、非日常的な環境の中で展開されるものである。つまり、社会人基礎力の育成が期待でき、他者との親密な関係性を育むことにも有効であると考えられる。キャンプ等の野外教育の教育効果については、築山ら（2008）が、スポーツを専門とする大学生を対象としたキャンプ実習における社会人基礎力の変容について検討し、青木ら（2012）、吉松ら（2015）によってもその効果が明らかにされている。他にも、林ら（2020）や川畑ら（2020）は、社会人基礎力を構成する能力と関連するコミュニケーション能力や社会的スキルの面から、さらに伊原ら（2021）は自己開示の深さの面から、教育効果について検討している。

しかし、野外教育を手法とした取り組みにおいて、教養教育科目として行われている大学キャンプ実習の効果を検討したものは多くなく、さらに短期間のキャンプ実習において、その継続効果についてまで検証されたものはあまり見られない。つまり教養教育科目として実施される、野外教育的アプローチの教育効果を検討することは、教養教育科目の充実のみに留まらず、教養教育に求められている今日の社会的課題解決の一助となることが考えられる。

---

[4] 経済産業省：社会人基礎力を育成する授業30選実践事例集、https://www.libertas.co.jp/pub/kisoryoku30prize.pdf（2023年11月27日最終閲覧）

[5] 文部科学省：学校基本調査 - 令和４年度結果の概要 -、https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt_chousa01-000024177_001.pdf（2023年11月23日最終閲覧）

[6] 文部科学省：中央教育審議会、新しい時代における教養教育の在り方について (答申)、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo ０ /toushin/020203.htm（2023年11月23日最終閲覧）

[7] ベネッセ教育総合研究所：第４回大学生の学習・生活実態調査、https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5772（2023年11月24日最終閲覧）

[8] ベネッセ教育総合研究所：第４回大学生の学習・生活実態調査結果速報、https://berd.benesse.jp/up_images/publicity/20220728_release.pdf（2023年11月24日最終閲覧）

そこで本研究では、教養教育科目として行われる大学キャンプ実習の教育効果について、社会人基礎力や自己開示の深さから検討することを主たる目的とした。

Ⅱ　対象および研究方法

1．対象とした講義

令和５年８月30日（水）～９月１日（金）の２泊３日の日程にて、鹿児島大学農学部附属演習林および大野 ESD 自然学校にて実施される、令和５年度鹿児島大学共通教育教養教育科目「自然体験活動入門講座～高隈の森の中で学ぶ～（以下、キャンプ実習）」を対象講義とする。なおキャンプ実習にあたっては、事前学習、事後学習を含む全日程への参加が受講条件となっている。

本キャンプ実習の学習目標は、１）自然の中で生活を通して、自然と人間（自分）との関わりについて考える、２）仲間との共同生活を通して、人間（自分）と人間（他人）との関わりについて考える、３）全ての活動を通して、自分自身についてもう一度見つめ直す、４）生活技術や野外活動技術を学ぶ機会となるという、４つを設けている。

キャンプ実習のプログラムは、冒険教育的な要素、環境教育的な要素を含み、全体を通して生活体験的要素を含んだものである（表１）。主な内容としては、１日目にアイスブレイクや班で課題を解決していく協力ゲーム、テント設営や野外炊事、夜の森の散策や星空観察を行うナイトプログラムを実施した。２日目は竹林から竹を切り出し、箸と器を作るクラフト活動やネイチャーゲーム、雨天のためキャンプファイヤーに代わり、キャンドルファイヤーを実施した。３日目は、本キャンプ実習のメインプログラムである沢登りを行い、その後、スタッフが作成したスライドショーの上映や個人やグループでの全体のふりかえりの時間を設けた。ふりかえりについては、毎晩班ごとにふりかえりの時間も設定し、その日のできごとや翌日の抱負などをグループ内で共有した。

班構成は、４班構成で各班８名を１つの班とし、それぞれ班つきのスタッフとして、野外教育を学ぶ学生を２名ずつ配置した。また、野外教育を専門とする専任の教員が全体の統括ディレクターを務め、自然学校職員を含めた４名が指導にあたる運営形態である。

食事については、７食中３食は野外炊事、２食は施設内の調理室を使用して食事づくりを行い、宿泊は、雨天のため体育館内にてテント泊であった。

2．調査対象者

調査対象者は、令和５年度のキャンプ実習（事前事後学習含む）に参加した学生32名（男性17名、女性15名）とした。なお、対象者の学年は、１年生28名、２年生４名であった。

表１　キャンプ実習の主なプログラム

	１日目 ８月 30 日	２日目 ８月 31 日	３日目 ９月１日
朝	大学出発 自然学校到着 開講式アイスブレイク	朝の集い 朝食（野外炊事） クラフト活動	朝の集い 朝食（提供） 沢登り
昼	昼食（提供） 協力ゲーム テント設営	昼食（自炊） ネイチャーゲーム	昼食（自炊） 大掃除 ふりかえり・閉講式 自然学校出発
夕	夕食（野外炊事） ナイトプログラム ふりかえり 入浴・就寝	夕食（野外炊事） キャンドルファイヤー ふりかえり 入浴・就寝	大学到着

３．調査内容および時期

（１）調査内容

（１）－１　社会人基礎力

対象者の社会人基礎力の変容を捉えるために、西道（2011）が作成した「社会人基礎力測定尺度」を用いた。この尺度は、経済産業省が提唱した「社会人基礎力」と文部科学省が提唱する「職業的発達に関わる諸能力」の概念的定義を整理し、作成されたものである。尺度は全40項目からなり、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」「伝える力」「チームで働く力」の４つの因子から構成される。それぞれの項目に対し、「１：全くない」から「４：とてもある」の４件法で回答するものである。社会人基礎力は合計点で評されることから、この得点が高いほど社会人基礎力は高いことを示す。

（１）－２　自己開示の深さ

対象者の自己開示の深さの変容を捉えるために、丹羽ら（2010）が作成した、「自己開示尺度」を用いた。この尺度は、日本人の若者が他者との親密な関係を構築していくうえで、どのくらい深い自己を開示しながら相互作用を行っているのかを検討するものである。尺度は全24項目からなり、「レベルⅠ：趣味」「レベルⅡ：困難な経験」「レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点」「レベルⅣ：否定的な性格や能力」の４つの因子から構成される。それぞれの項目に対し、「１：何も話さない」から「７：十分に詳しく話す」の７件法で回答するものである。自己開示の深さは合計点で評されることから、この得点が高いほど自己開示が深いことを示す。

（１）－３　班のメンバーにおける親しい者の人数

対象者の班のメンバーにおける親しい者の人数の変容を捉えるために、班内における親しい者の人数について、０名から７名の範囲で回答を求めた。

（１）－４　自由記述レポート

自由記述レポートは、「自然体験活動入門講座における学びと課題」というテーマで、実習終了後 Word データでの提出を求めた。なお、このレポートは実習の記録として、その他レポート課題や活動写真などと一緒に製本され、実習事後学習の際に配布されるものである。

（２）調査時期

調査対象者に対し、キャンプ実習前（以下、Pre）とキャンプ実習最終日（以下、Post 1）、キャンプ実習終了２ヶ月後（以下、Post 2）に、集団調査法にて実施した。自由記述レポートに関しては、参加者に対し、「１週間程度落ち着いてキャンプや自分の生活を振り返る期間を設けてから記入すること」を閉講式の際に教示し、その後２週間以内での提出を求めた。

４．分析方法

社会人基礎力、自己開示の深さについては、参加者に対して行った調査結果から、３つの時期（Pre、Post 1、Post 2）における一要因分散分析を実施した。さらにキャンプ実習での交友関係の構築が社会人基礎力や自己開示の深さに影響するかを検討するために、Pre、Post 1での班内における親しい者の人数から２つの群（親しい者の人数が基準値より高い群、低い群）に分け、時期（３水準）、群（２水準）の二要因分散分析を行った。交互作用が有意な場合は、単純主効果の検定および Bonferroni 法による多重比較を行った。なお、統計処理には、IBM SPSS Statics29を使用し、この時統計的有意水準は５％とし、10％を有意傾向とした。

また、自由記述レポートについては、全てのレポートを精読し、実習での学びについて学習目標を参考にカテゴリー化を行いながら抽出した。この際、信頼性を確保するため、共同研究者と協議し分析を実施した。

５. 倫理的配慮

調査集計に関しては、調査実施前に口頭にて調査の目的を説明し、研究協力は任意であり、協力しない場合や途中辞退しても学業成績への影響やあらゆる不利益は全くないこと、さらに回答されたデータは同意を得られた者のみ研究活用し、回答結果等は個人が特定されないようにすることを説明した。

Ⅲ　結果

１. キャンプ実習における社会人基礎力の変容

対象者の Pre、Post １、Post ２の３つの時期における、社会人基礎力得点の変化を、それぞれの平均値を用いて、反復測定の一要因分散分析を行った（表２、図１）。その結果、「社会人基礎力全体（F[2,29]=14.43,p<.001）」で有意な得点の違いが示された。さらに、多重比較を行ったところ、Pre(108.03)-Post １(123.22) 間、Pre(108.03)-Post ２(121.81) 間で有意な得点の違いが示され、いずれも Pre よりも、Post １、Post ２で得点が高かった。同様に下位因子においても分析を行ったところ、「前に踏み出す力（F[2,29]=14.43,p<.001）」、「考え抜く力（F[2,29]=14.43,p<.001）」、「伝える力（F[2,29]=14.43,p<.001）」、「チームで働く力（F[2,29]=14.43,p<.001）」の全ての因子で有意な得点の違いが示された。さらに多重比較を行ったところ、全ての因子で Pre-Post １間、Pre-Post ２間で有意な得点の違いが示され、いずれも Pre よりも、Post １、Post ２で得点が向上していた。

表２　社会人基礎力得点の一要因分散分析結果

因子名	Pre		Post1		Post2		F値	η2	多重比較
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD			
社会人基礎力全体	108.03	17.66	123.22	19.13	121.81	19.71	14.43***	0.31	Pre<Post1 , Pre<Post2
前に踏み出す力	21.38	4.64	24.31	4.63	24.31	4.45	11.55***	0.27	Pre<Post1 , Pre<Post2
考え抜く力	29.09	5.19	33.19	5.46	33.16	5.61	13.08***	0.29	Pre<Post1 , Pre<Post2
伝える力	23.35	4.41	26.59	5.18	26.78	5.08	9.98***	0.24	Pre<Post1 , Pre<Post2
チームで働く力	34.22	5.32	39.13	5.93	37.56	6.00	13.03***	0.29	Pre<Post1 , Pre<Post2

***：p<.001

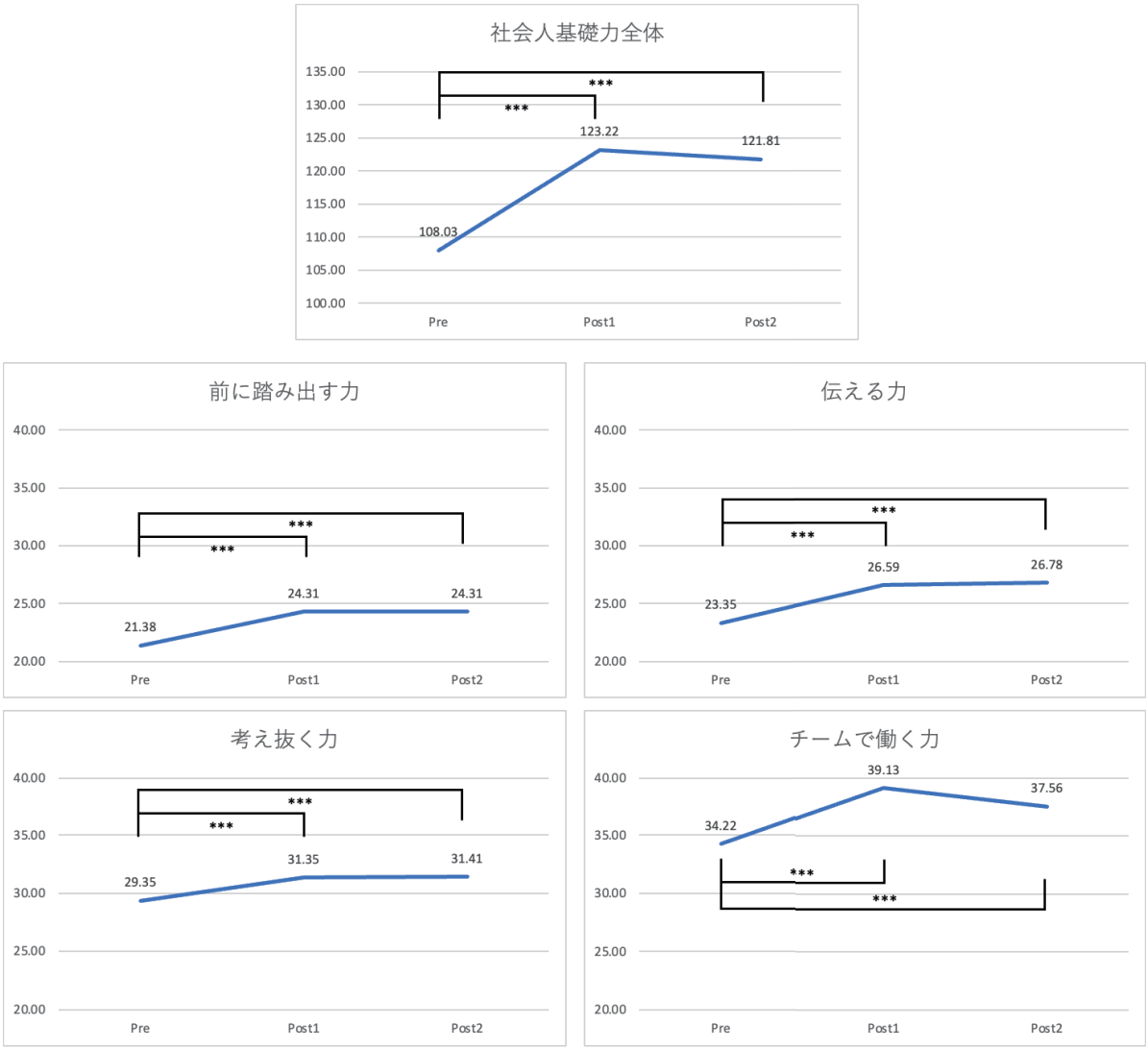

図１ 社会人基礎力得点の一要因分散分析結果図

２. キャンプ実習における自己開示の深さの変容

対象者の Pre、Post 1、Post 2の３つの時期における、自己開示の深さ得点の変化を、それぞれの平均値を用いて、反復測定の一要因分散分析を行った（表３）。その結果、「自己開示の深さ全体（F[2,29]=2.01,n.s.）」では有意な得点の違いは示されなかった。同様に下位因子についても分析を行ったところ、「レベルⅢ（F[2,29]=3.00,p<.1）」においてのみ有意傾向が示され、多重比較の結果、Pre よりも、Post １、Post ２で得点が高かった。しかし、「レベルⅠ（F[2,29]=2.37,n.s.）」、「レベルⅡ（F[2,29]=1.08,n.s.）」、「レベルⅣ（F[2,29]=1.39,n.s.）」の項目では有意な得点の違いは示されなかった。

表３　自己開示の深さ得点の比較

因子名	Pre		Post1		Post2		F値	η2	多重比較
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD			
自己開示の深さ全体	95.53	31.74	95.41	33.12	104.38	28.41	2.01	0.60	
レベルⅠ	35.72	9.01	37.84	8.43	38.56	7.04	2.37	0.70	
レベルⅡ	15.53	6.35	14.44	6.75	15.91	6.18	1.08	0.70	
レベルⅢ	21.22	9.51	21.34	9.85	24.72	8.79	3.00†	0.90	Pre<Post2,Post1<post2
レベルⅣ	23.06	11.60	21.78	11.42	25.19	10.98	1.39	0.40	

†：<.1

３. 班内における親しい者の人数の変容

対象者の Pre、Post 1の２つの時期において、班内における親しい者の人数は、キャンプ前の時点では平均0.69人であったが、キャンプ後は4.69人となり、キャンプ前後で親しい人数の平均は4.00人増加した。また Post 2の時期における親しい者の人数の平均は5.53人であり、キャンプ前に比べ4.84人、キャンプ後に比べ0.84人増加した。そこで、Pre、Post 1の結果から、キャンプ実習において、班内で親しくなった人数4.00人を基準とし、親しい人数が基準を上回った群を高群（n=15)、親しい人数が基準より下回った群を低群（n=17）とし、両群の比較を行う。

４. 親しい人数の高群、低群と社会人基礎力得点、自己開示の深さ得点の比較

（１）社会人基礎力の比較

社会人基礎力得点に関して、班内における親しい者の人数の高低群と期間の二要因分散分析を行った（表４、図２)。その結果、「社会人基礎力全体」の交互作用において有意傾向が認められた（F[2,26]=2.74,p<.1)。同様に下位因子においても分析を行ったところ、「考え抜く力(F[2,26]=3.84,p<.05)」において交互作用が認められ、「伝える力（F[2,26]=2.80,p<.1)」においては有意傾向が認められた。

「社会人基礎力全体」について、単純主効果の検定を行った結果、高群において時期要因の単純主効果が見られ（F[2,26]=14.41,p<.001)、多重比較の結果、Pre よりも Post 1、Post 2において高い得点を示した。低群においては時期要因の単純主効果の有意傾向が見られたが(F[2,26]=2.64,p<.1)、多重比較の結果、統計的には有意な組み合わせは示されなかった。また、Post 1において群要因の単純主効果が有意であり（F[1,26]=5.44,p<.05)、Post 2においては有意傾向が見られ（F[1,26]=5.44,p<.1)、いずれも高群の得点が高かった。

次に、「考え抜く力」について、単純主効果の検定を行った結果、高群において時期要因の単純主効果が見られ（F[2,26]=15.49,p<.001)、多重比較の結果、Pre よりも Post 1、Post 2において高い得点を示した。また、Post 1において群要因の単純主効果が有意であり（F[1,26]=4.40,p<.05)、Post 2においては有意傾向が見られ（F[1,26]=3.69,p<.1)、いずれも高群の得点が高かった。

さらに、「伝える力」について、単純主効果の検定を行った結果、高群において時期要因の単純主効果が見られ（F[2,26]=11.37,p<.001)、多重比較の結果、Pre よりも Post 1、Post 2において高い得点を示した。一方、「前に踏み出す力」、「チームで働く力」においては、群と時期要因の主効果が見られたが、交互作用は見られなかった。

表４　社会人基礎力得点の二要因分散分析結果（時期×友人高低群）

因子名	群	n	Pre		Post1		Post2		交互作用(F)	主効果		単純主効果			
			Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	偏 η^2	群（F）偏 η^2	時期（F）偏 η^2	群（F）Pre	群（F）Post1	群（F）Post2	時期(F)
社会人基礎力全体	友人高群	15	108.80	22.25	131.20	18.75	128.80	18.94	2.74 †	3.26 †	15.59 *** Pre<Post1 Pre<Post2	0.05	5.44*	3.74 †	14.41 *** Pre<Post1 Pre<Post2
	友人低群	17	107.35	13.75	116.18	17.67	115.65	19.41	0.08	0.10	0.34				2.64 †
前に踏み出す力	友人高群	15	22.20	5.97	26.20	4.89	25.87	4.00	0.98	3.92 †	11.19 *** Pre<Post1 Pre<Post2		-		-
	友人低群	17	20.65	3.26	22.65	3.95	22.94	4.63	0.03	0.12	0.27				
考え抜く力	友人高群	15	28.80	6.06	35.27	5.12	35.13	5.81	3.84 *	2.23 †	14.27 *** Pre<Post1 Pre<Post2	0.09	4.40*	3.69 †	15.49 *** Pre<Post1 Pre<Post2
	友人低群	17	29.35	4.64	31.35	5.40	31.41	5.16	0.11	0.07	0.32				1.77
伝える力	友人高群	15	22.87	5.51	28.07	5.60	28.13	4.97	2.80 †	1.06	10.55 *** Pre<Post1 Pre<Post2	0.31	2.31	2.00	11.37 *** Pre<Post1 Pre<Post2
	友人低群	17	23.76	3.44	25.29	4.73	25.59	5.17	0.09	0.03	0.26				1.35
チームで働く力	友人高群	15	34.93	6.67	41.67	4.91	39.67	5.25	1.60	4.287 *	12.99 *** Pre<Post1 Pre<Post2		-		-
	友人低群	17	33.59	4.09	36.88	6.14	35.71	6.33	0.21	0.13	0.30				

†：<.1, *：<.05 , **：p<.01, ***：p<.001

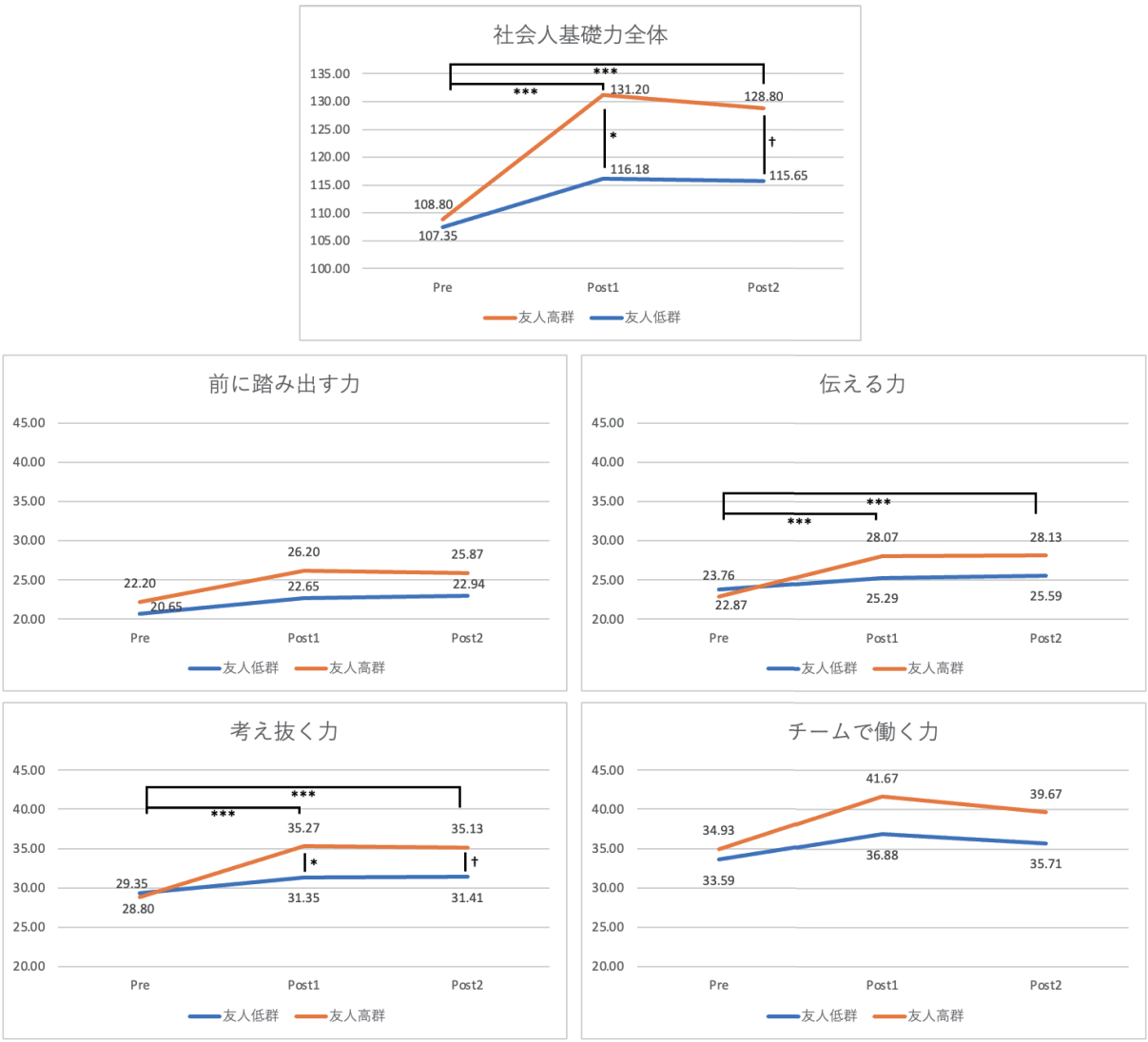

図２　社会人基礎力得点の二要因分散分析結果図

（２）自己開示の深さの比較

自己開示の深さ得点に関して、班内における親しい人数の高低群と期間の二要因分散分析を行った（表５）。その結果、「自己開示の深さ全体」の交互作用は認められなかった（F[2,26]=0.25,n.s.）。同様に下位因子においても分析を行ったところ、「レベルⅠ（F[2,30]=0.29,n.s.）」、「レベルⅡ（F[2,26]=0.37,n.s.）」、「レベルⅢ（F[2,26]=0.88,n.s.）」、「レベルⅣ（F[2,26]=0.33,n.s.）」の全ての因子において、交互作用は認められなかった。なお、レベルⅢにおける時期の主効果が有意傾向であり多重比較を行ったが、統計的には有意な組み合わせは示されなかった。

表５　自己開示の深さ得点の二要因分散分析結果（時期×友人高低群）

因子名	群	n	Pre		Post1		Post2		交互作用(F)	主効果		単純主効果			
			Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	偏η^2	群（F）偏η^2	時期（F）偏η^2	群（F）Pre	群（F）Post1	群（F）Post2	時期(F)
社会人基礎力全体	友人高群	15	108.80	22.25	131.20	18.75	128.80	18.94	2.74 †	3.26 †	15.59 *** Pre<Post1 Pre<Post2	0.05	5.44*	3.74 †	14.41 *** Pre<Post1 Pre<Post2
	友人低群	17	107.35	13.75	116.18	17.67	115.65	19.41	0.08	0.10	0.34				2.64 †
前に踏み出す力	友人高群	15	22.20	5.97	26.20	4.89	25.87	4.00	0.98	3.92 †	11.19 *** Pre<Post1 Pre<Post2		-		-
	友人低群	17	20.65	3.26	22.65	3.95	22.94	4.63	0.03	0.12	0.27				
考え抜く力	友人高群	15	28.80	6.06	35.27	5.12	35.13	5.81	3.84 *	2.23 †	14.27 *** Pre<Post1 Pre<Post2	0.09	4.40*	3.69 †	15.49 *** Pre<Post1 Pre<Post2
	友人低群	17	29.35	4.64	31.35	5.40	31.41	5.16	0.11	0.07	0.32				1.77
伝える力	友人高群	15	22.87	5.51	28.07	5.60	28.13	4.97	2.80 †	1.06	10.55 *** Pre<Post1 Pre<Post2	0.31	2.31	2.00	11.37 *** Pre<Post1 Pre<Post2
	友人低群	17	23.76	3.44	25.29	4.73	25.59	5.17	0.09	0.03	0.26				1.35
チームで働く力	友人高群	15	34.93	6.67	41.67	4.91	39.67	5.25	1.60	4.287 *	12.99 *** Pre<Post1 Pre<Post2		-		-
	友人低群	17	33.59	4.09	36.88	6.14	35.71	6.33	0.21	0.13	0.30				

†：<.1, *：<.05 , **：p<.01, ***：p<.001

５．キャンプ実習における自由記述レポート

キャンプ実習終了後に提出を求めた、自由記述レポート（キャンプ実習の学びと今後の課題に関するレポート）について、学習目標を参考に抽出を行った結果を示す（表６、７）。

キャンプ実習における学びについては、「自然と人間との関わり」の中で、自然の壮大さや偉大さ、美しさや恐ろしさといった「自然の姿」や、身の回りにある自然への気づきや自然と触れ合う時間の大切さ、自然を感じようとする姿勢の重要性といった「自然との付き合い方」についての記載が見られた。また、「自分と他人との関わり」の中で、人間関係を構築するには多くの時間を必要としないことや僅かな時間でも深い絆が生まれるといった「人間関係の理解」や同じ目的に対して考えを共有することの重要性やお互いを信じる機会が重要であるといった「交友関係の構築・醸成」、協力することの大切さやコミュニケーションが持つ力の大きさといった「協力・コミュニケーションの重要性」についての記載が見られた。「自分自身」については、行動することの重要性や挑戦することの大切さ、試行錯誤する中で最適解を見つけるといった「実行力の重要性」、勇気を出して発言することや言葉に出すことの重要性といった「言語化の重要性」、考えるという工程や目標を持って取り組むことの重要性といった「計画力の重要性」、出会いを大切にすることや人生はいろいろ経験した方が楽しいことといった「広い視野の重要性」、自分でも気がついていなかった自分の一面といった「自分自身の可能性」についての記載が見られた。「生活技術や野外活動技術」については、非日常という環境の中で感じた「日常生活の充実」についての記載が見られた。

表６　キャンプ実習における学びについての自由記述抜粋

自然と人間の関わり	自然の姿	自然の壮大さや偉大さ
		自然の美しさと恐ろしさ
		自然の持つ様々な一面
		自然のありがたみと怖さ
		自然の素晴らしさ
		自然の豊かさ
		知らなかった自然の一面
	自然との付き合い方	自然との関わり
		自然は自分で感じようとしなければ、そこにあっても何も感じられないということ
		身の回りにも多くの自然があること
		自然と触れ合う時間の大切さ
		五感を使っての学びは、記憶に残るだけでなく、発見も多く見つかるということ
		自然に触れることの大切さ
自分と他人との関わり	人間関係の理解	人と関わっていくことの楽しさ
		人と人とが信頼関係を構築するのに時間の長さは必須ではないこと
		僅かな時間でも、意見を出し合い試行錯誤することで、深い絆が生まれるということ
		人とのつながりの重要性
		思いやる心が活動を楽しくしてくれる
		集団で行動することの面白さ
		信頼することの大切さ
		信頼感は単に付き合いの長さから得られるのではなく、共に過ごした時間の濃さや、支え支えられたという経験から生まれるもの
		仲間の大切さ
		同じゴールに向かって共に頑張ることの素晴らしさ
	交友関係の構築・醸成	同じ目的に対して考えを共有することの重要性
		一緒に体を動かしながら何かに取り組むことが、人と人との心を近づけるものだということ
		自分の意見を強く持ちつつも、周りの意見を聞き、チームとして1つの意見を出すこと
		自分の意見を突き通すのではなく、人の話も聞いてチームとしての答えを出すことが大切
		1人で解決できない課題では、議論を通した仲間の意見が重要であること
		単独ではどうにもならないことも、複数人で解決方法を考え、試行錯誤することで乗り越えることができることが分かった
		仲間と議論を繰り返し、お互いの意見を出し合う大切さや重要性
		仲間づくりに必要なのは時間ではなく、お互いを信じるための機会が必要
		はっきり自分の意見を言うだけでなく、相手の気持ちも考え、どうすればわだかまりなく課題遂行できるのか
		一人一人の意見を尊重し、課題解決に向けてそれぞれが向き合うこと
		周りの発言に反応する重要性
		一緒に解決策を考えるという思いやりが必要
		周りの人たちへの感謝の気持ちを持つこと
		相手に信頼してもらえるように行動、発信すること
		発信しやすい雰囲気づくりの重要性
		自分が感じたことをすぐに言語化して周りに伝えることで、改めて自分が何を感じたのか、学んのかを深く理解できること
	協力ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝの重要性	協力が可能性を広げ、日々を豊かにする鍵であるということ
		協力することには意味があると確信できた
		協力することで、達成できそうにないことも簡単に達成が可能になるということ
		協力は信頼を生む
		グループのみんなで協力することの大切さ
		コミュニケーションが持つ力の大きさ
		コミュニケーションの中で、自己表現の連続と相手を知り判断する連続があること
		作業を分担して協力することの大切さ
自分自身について	実行力の重要性	行動することの重要さ
		試行錯誤して、戦略や計画を立てることで、目標がより達成しやすくなること
		試行錯誤する中で最適解を見つける
		試行錯誤をひたすらすること
		自分から率先して動くことが大切である
		挑戦することの大切さ
		恐怖や恥ずかしさや不安の中で、その一歩目を踏み出してみることの大切さ
		目標をもって取り組むことの重要性
		目標に向かって、どのように意見を取り入れ、行動していくか
		根気強く行動すると、必ず成果が出るということ
		何事にも挑戦してみることの大切さ
	言語化の重要性	感じたことや発見を言葉にして人に伝えていくことは必要だと気づいた
		助けを求めることのできる素直さの必要性
		言葉に出すことの重要性
		自分自身が考え、意見を出し、行動することの大切さ
		勇気を出して発言すること
	広い視野の重要性	人生はいろいろ経験した方が楽しいこと
		分からないことを知ろうとすること
		考えるという工程の重要性
		日常の中には見逃している情報がたくさんあるということ
		一つ一つの出会いを大切にすること
		視覚にどれほど頼っているか
		考えることの重要性
	自分自身の可能性	自分でも気がついていなかった、自分の一面
		他の人と自分とでは物の見方が変わっていること
		新しい集団の中で、なりたい自分になれる可能性があること
		スマホの通知が自身の日常生活をとても邪魔していたこと
生活技術や野外活動技術	生活の変化	「便利」を取り除いた生活のキツさや楽しさ
		非日常での生活を通した忍耐力
		体験を通して実践的に学ぶことで、より身をもって深く学ぶことができるということ
		メリハリをつけること
		身近にあることが当たり前ではないということ

キャンプ実習における今後の課題については、自然を感じる力を活かして自然と関わりたい、身の回りの自然や物事に対して視点を変えながら目を向けていくといった、「自然との関わり」に関する記載が見られた。また、出会いを大切にしながら、自ら積極的なコミュニケーションを

取り相手へ意見を主張することや、周りの人に気を配る、周りに助けを求めたり協力したりするといった「他者との関わり」に関する記載が見られた。さらに、受信者から発信者になりたいや大変だと思うことにも挑戦する、広い視野で物事を見て行動に移す、身の回りのものに敏感でありたいといった「自分自身の変化」に関する記載が見られた。他にも、インターネットやスマートフォンなどとの付き合い方といった「生活の変化」に関する記載も見られた。

表7　キャンプ実習における今後の課題についての自由記述抜粋

自然との関わり	自然を感じる力を活かして、自然と関わりたい
	身の回りの自然や物事に対し、視点を変えながら目を向けること
	身の回りのたくさんの自然に気がつく視野を広げる
他者との関係	相手の意見をよく聞いて賛同するだけでなく、自分の意見も出してみることができる関係を構築する
	相手を信じて、自分自身一所懸命に動いてみる
	一期一会の出会いを大切にすること
	今まではあまり話しかけられなかった人にも積極的に話しかけて仲良くなりたい
	これから出会う人、仲を深めたいと思う人に対して、自分からどのように働きかけることで関係が築いていけるのか模索していきたい
	今後このような体験を誰かに経験させてあげることのできる活動に取り組みたい
	誰に対しても分け隔てなく関わることができるような行動をする
	話し合いをする時に他人任せにしない
	親しい間柄にもしっかりと敬意を示す
	自分から積極的に人に関わっていこう
	自分から積極的にコミュニケーションを取ろうと思った
	自分から始まりを作っていこうとする心意気と実行する勇気を持つ
	自分の意見を相手にしっかりと伝えること
	自分の意見をきちんと主張できるようになりたい
	他者に意見を伝え、自分の考えも整理していく
	積極的にグループ活動に参加して話し合いを良いものにしたい
	友達をもっと増やすこと
	どんな状況であってもしっかりと感謝を述べること
	仲間が困っている時には、すぐに助け舟が出せるような人間になる
	話しかけられるのを待つのではなく、自分から話しかけて、コミュニケーションを図りたい
	まずどんな人の意見でも素直に聞くような習慣をつけようと思う
	周りに気を配れるようになりたい
	出会う全ての人と仲良くなる努力、相手のことを知ろうとする努力をしよう
	人との交友関係を深めていく上で、自分から深めようという思いで行動を起こしたい
	人見知りだった性格を直すこと
	困難な状況に陥ったときに1人でやり遂げようとせず、周りに助けを求めたり協力したりする
	機会があれば進んでリーダーシップを取れるようになりたい
自分自身の変化	行き詰まった時に、新しい経験をすること
	一見面倒なことにも、何かを見つけようとする積極的な姿勢で取り組みたい
	様々なことに躊躇わず挑戦してみようと思った
	自分が信頼することも大切であるが、相手に信頼してもらえるように常日頃の行動を意識する
	積極的に議論へ参加できるような自信をつけていくこと
	積極的に発信をしていくこと
	大変だと思うことにも挑戦してみよう
	できないと決めつけるのではなく、たくさんのことに挑戦したい
	何事に対しても試行錯誤を繰り返し、最善を見つけること
	広い視野で物事を見て行動に移す
	「受信者から発信者」になる
	身の回りのものや起こっていることに対して、敏感でありたい
	一歩踏み出す勇気を持って取り組みたい
	興味を持ったものに全力で取り組む
	自分にできることは何かを考える
	初めてのことにも積極的に行動する
生活の変化	インターネットとの付き合い方を考える
	スマホとの適切な距離を作っていくこと
	スマホとやインターネットとの付き合い方

Ⅳ　考察

1．キャンプ実習における社会人基礎力の変容

本研究の結果から、対象者の社会人基礎力は、全ての因子においてPreからPost 1にかけて有意な向上が見られ、さらにPost 2までその効果が維持されていることが明らかとなった。徳田

ら（2019）は、キャンプ実習は常に共同生活であり、非日常でありストレスを感じやすいこと、さらに、課題に挑戦する機会や個人・各班の想いや感じたことを共有する機会があることなど、社会人基礎力に有効であるポイントが図らずとも合致していることを述べている。今回のキャンプ実習は、２泊３日の様々な自然体験活動を通して、自然との触れ合いを深め、仲間と協力して成し遂げる喜びを体験し、自分の可能性について見つめ直すことをねらいのもと、同様の機会が提供されていたことが考えられる。非日常的な環境におけるキャンプ実習での生活は、集団生活であるが、それぞれのグループの状況や役割に応じて主体的に行動する必要がある。また、協力ゲームやネイチャーゲーム、沢登り等の活動においては、参加者にとって挑戦の連続であり、それらの課題を解決するために、試行錯誤しながら自ら考え、思いを共有しながらグループで活動することが求められた。各活動や１日の終わりには、常にふりかえりの時間を設けられ、互いの考えや思いを共有することができていた。その中で、キャンプ実習の学びのレポートには、「恐怖や恥ずかしさや不安の中でその一歩を踏み出してみることの大切さ」という「前に踏み出す力」に関連する記述や、「協力ゲームでは挑戦と失敗を経て再び考え話し合うということが何度も繰り返された」、「同じゴールに向かって共に頑張ることの素晴らしさを感じた」、「一人ひとりの意見を尊重し、課題解決に向けてそれぞれが向き合った」という「伝える力」や「考え抜く力」、「チームで働く力」という、社会人基礎力に関連する記述や、個人やグループで試行錯誤しながら、様々な活動に取り組むことができた様子が伺えた。他にも、「活動ごとにふりかえりをしていくので、自分が感じたことをすぐに言語化し、学びを深く理解することができた」という記述もあり、ふりかえりを通して学びを深めることができていた。さらに、キャンプ後にも社会人基礎力の効果が維持されていた。キャンプ実習における今後の課題では、積極的に他者と関わることや、大変だと思うことにも挑戦すること、一歩踏み出す勇気を持つことなどが挙げられていたが、実際にそのような課題意識を持ち、キャンプ実習後の生活において取り組むことができたことが影響していると考えられる。

以上のことからも、キャンプ実習は参加者の社会人基礎力の育成に有効であり、実習後もその効果が継続されたことから、一時的な効果ではなく、実習での学びが日常生活へ還元された可能性を示唆する結果となった。また、今回は社会人基礎力の向上を意図したプログラムではなかったが、そのような中で、一定の教育効果を得ることができたことは大きな収穫である。

２．キャンプ実習における自己開示の深さの変容

自己開示の深さについては、レベルⅢ（決定的な欠点弱点）においてのみ Pre から Post 1にかけて有意な向上傾向が見られ、さらに Post 2までその効果が維持されていることが明らかとなった。しかし、それ以外の因子においても、Pre から Post 2にかけて得点が向上し、教育効果が期待される結果となった。伊原ら（2021）は、３泊４日の大学キャンプ実習においては、様々なコミュニケーションが求められ、多くの困難な場面に直面するため、このような環境を通して親しくなった人数も増え、自己開示の深さも深まったことを報告している。実習の学びのレポートからも「コミュニケーションが持つ力」、「協力することで、達成できそうにないことも簡単に達成が可能なこと」を学んだと記述した学生が見られ、さらに「将来の夢や悩んでいることなど踏み込んだ話もできるようになり、とても楽しめた」と自己開示を深めながら過ごした学生の様子も伺えた。以上のことからも、キャンプ実習において自己開示は深まることは期待されるものの、今回の入門編という位置付けの２泊３日の短期間のキャンプ実習では、自己開示を決定的に深めるまでには至らなかったことも考えられた。山田ら（2010）の研究においては、３泊４日のキャンプ実習において、今回の実習同様に自己開示の向上は示されなかったことを報告している。多くの先行研究では、スポーツを専門とする大学生における、３泊以上の長期のキャンプ実

習において調査を実施しているため、今後対象者の特性やプログラムの違いに配慮しながら、さらに検討していく必要がある。

３．キャンプ実習における交友関係の構築と社会人基礎力、自己開示の深さの変容

交友関係の構築については、Pre から Post 2にかけて班内の親しい友人の人数が増加していた。今回の対象者は、親しい友人がいる状態でキャンプ実習に参加するものは少なく、さらに班を分ける際には、学部や学科等に配慮しながら振り分けをしたことで、キャンプ実習を通して親しい人数が増加したことが考えられる。また、プログラムは他者とのコミュニケーションが求められる場面が多く、他者との協力の中で活動が進められる内容となっていた。参加者のレポートからも、「ほとんど接点のない初対面の方々と２泊３日の生活の中で、仲良くなることができるだろうか、楽しめるだろうかという気持ちでいっぱいでした」、「学部や学年が異なり、最初は見ず知らずの人たちと班員になったことに不安を覚えた」という記載が見られた一方で、「信頼関係を構築するのに時間の長さは必須ではないこと」、「わずかな時間でも、意見を出し合い試行錯誤することで、深い絆が生まれること」、「親友と呼べるほど班員と仲良くなることができた」という記載も確認することができた。

またこのキャンプ実習前後の交友関係から、班内の親しい人数が平均よりも高い群とそれ以外の群に分け、社会人基礎力と自己開示の深さを検討した。その結果、班内の友人高群の方が、Pre から Post 2にかけて社会人基礎力を向上させ、特に、伝える力や考え抜く力をより向上させている結果となった。実際にキャンプ実習においては、事前学習、キャンプ実習、事後学習の中で、参加者同士が多く関わりを持ち、交友関係を構築しながら過ごす様子が見られた。またキャンプ実習全般の中で、交友関係をより深めることができた者は、グループ内でも課された課題に対して現状を分析し、その解決に向けたプロセスについて考え、意見を交わす機会が多かったことが考えられる。「１人では解決できない課題は仲間の意見が重要である」、「複数人解決方法を考え、試行錯誤することで乗り越えられることがわかった」、「考えるという過程の重要さについて考えさせられた」という回答もあり、キャンプ実習全体を通じて、より多くの友人と試行錯誤し、成功した経験を得ることができたことにより、社会人基礎力が向上したのではないかと考える。

しかし、自己開示の深さについては友人の人数は特に影響しない結果となった。自己開示について、丹羽ら（2010）は、相手との関係性が親密になるにつれて、人は深層的な自己開示をより多く行うことを示唆している。さらに、榎本（1997）は、自分がどのような人間かを他者に知ってもらうために自分自身をあらわにする行動を指すとしている。今回の実習においては、２泊３日と期間が短く、プログラム間の時間にもあまりゆとりがなかった。プログラムとは別に、何気ない会話をするなどといった時間的なゆとりを持つことで、参加者同士が交流するきっけが増加し、それが自己開示を深めることにつながることも考えられる。さらに、スタッフとの関わりにおいても、「一人一人の振り返りに対して指導員の人がコメントをしてくれたので、他の人の振り返りを聞きながらも、改めて、なるほど、確かになどと思う事がよくあった」という記載もあった。今後のキャンプ実習の中では、参加者の人数も考慮しながら、担当教員やスタッフ等ともより関わり、話をする機会を設けることで、自己開示が深まることも期待できるのではないかと考える。今回キャンプ実習において、交友関係が構築されたことは示唆されたため、この実習を機に、今後の参加者の自己開示が深まることを期待したい。

Ⅴ　まとめ

本研究の目的は、教養教育科目として行われるキャンプ実習の教育効果について、社会人基礎

力や自己開示の深さから検討することであった。その結果、以下のことが明らかとなった。
（1）キャンプ実習は、社会人基礎力を構成する能力への教育効果があり、実習後の生活においても、継続した向上効果が期待できる。
（2）２泊３日という短期間のキャンプ実習においては、自己開示の深さを決定的に深めるまでには至らない。
（3）キャンプ実習は、様々な他者と関わる活動を通して、親しい者の人数を増加させるといった、より良い交友関係が構築される機会となる。
（4）キャンプ実習において、親しい友人を増やすことができた者は、そうでない者と比較し、社会人基礎力をより高く向上させることができるが、自己開示の深さには親しい友人の数は影響しない。

本研究の結果から、教養教育科目として行われるキャンプ実習の教育効果の一側面が示された。本キャンプ実習は教養教育科目として行われ、入門編としての実習であるため、初年次学生の参加者が多い。今後も教養教育科目としての教育効果の検証を実施していくだけでなく、アドバンス編として初年次学生以外への野外教育の手法を用いたプログラムの検討も望まれる。また今回実施した野外教育の手法を用いたアプローチは、学生が主体的に学ぶ実体験を活用した学習機会であり、大学での学びに重要な、自分で考えて表現する力や他者と協力して課題解決に取り組む力の育成にも貢献しうる機会である。野外教育という教育手法が、大学教育や教養教育にいかに貢献することができるのか、今後も検討を重ねたい。

参考文献

・青木康太郎，粥川道子，杉岡品子（2012）「キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究」，『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』3, 27-39
・伊原久美子，冨山浩三，小林博貴，徳田真彦（2021）「体育学部キャンプ実習における大学生の自己開示の深さおよび実習に対する意識と体験の評価について」，『大阪体育大学紀要』52, 61-72
・榎本博明（1997）『自己開示の心理学的研究』北大路書房
・川畑和也，福満博隆（2020）「自然体験活動が社会的スキルの獲得に及ぼす影響－シャイネス感情に着目して－」，『青少年教育研究センター紀要』8, 32-41
・西道実（2011）「社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み」，『プール学院大学研究紀要』，51，217-228
・自然体験活動研究会（2011）『野外教育入門シリーズ第１巻－野外教育の理論と実践』株式会社杏林書院
・築山泰典，神野賢治，田中忠道（2008）「大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討」，『福岡大学スポーツ科学研究』39(1)，13-26
・徳田真彦，粥川道子，安原政志，佐藤悦子（2017）「自然体験活動が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす影響」，『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』8, 127-139
・丹羽空，丸野俊一（2010）「自己開示の深さを測定する尺度の開発」，『パーソナリティ研究』18(3)，196-209
・林直也，佐藤博信，溝畑潤（2020）「キャンプ実習が大学生のコミュニケーションスキル及び基礎力に及ぼす効果に関する研究」，『Human Welfare :HW』12(1)，103-118
・山田亮，粥川道子（2010）「大学キャンプ実習における参加者の信頼感および自己開示に及ぼす影響」，『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』, 1, 83-91
・吉松梓（2015）「「アウトドア」の授業が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響：授業アンケートとレポートの分析を中心として」，『駿河台大学論業』50, 143-157

Examination of the Educational Effects of University Camp Program Conducted as a General Education
Focusing on Fundamental Competencies for Working Persons and Self-Disclosure

KAWABATA Kazuya　FUKUMITSU Hirotaka　FUKUSHIMA Yasuhiko

Keywords: university camp, general education, fundamental competencies for working persons, self-disclosure.

Summary

Modern society is said to be a time of rapid change, complexity, and difficulty in predicting. In university education, various initiatives are being undertaken to help students acquire the skills necessary to survive in this era. One way to do this is to use outdoor education methods, which are thought to have an impact on improving the ability to respond to change, such as the fundamental competencies for working persons and building relationships with others. Therefore, the purpose of this study is to clarify the educational effects of such outdoor education methods through a university camp program held as part of general education from the perspective of changes in fundamental competencies for working persons and self-disclosure.

Participants in the camp program were surveyed about their fundamental competencies for working persons, the depth of their self-disclosure, and the number of close friends in their group, and were also asked to submit open-ended descriptive reports. The results showed that the university camp program had an impact on improving the fundamental competencies for working persons, and the effects continued two months later. Regarding the depth of self-disclosure, it was found that although a three-day camp program can be expected to have an effect, it is not enough to have a decisive effect. In addition, the lessons learned during the camp training and future issues were divided into four categories, and the content was summarized into “nature”, “others”, “oneself”, and “life”. Furthermore, it was suggested that those who have deepened their friendships and made more friends during the training camp were able to improve their fundamental competencies for working persons compared to those who did not.